

Passions 論 へ の 手 が か り

徳 村 佑 市

(Esquisse préparatoire à un traité des passions)

1. Passions 論の一つの系譜

フランスでは16世紀後半から17世紀末にかけて、passions (情熱・情念) についての論議が盛んであった。これは16世紀後半の宗教戦争その他の社会的混乱を背景として、人間の生き方が真剣に求められたためであり、16世紀後半から17世紀の終わりまで、いろいろな人が、この passions の問題について意見を發表している。我が国でもよく知られているデカルト、パスカル、ボッシュエなども、この問題についての考察を残している。デカルトやパスカルのような高名な人たちはばかりではなく、我が国ではほとんどその名を知られていない人々も、それぞれの立場から、この問題について書いたものを残している。ここではその無名な思索家の一人、Anthoine Coublaut の著書を取りあげ、その思索がどのような系譜に属するかを考察してみたい。

Anthoine CoublautはSaint Eustacheの聖職者団に属する僧で、1681年に、Réflexions spirituelles sur les passions, ou les passions traitées par rapport à la vie spirituelle という書物を刊行した。

彼はその中で、人間にはある内的力があるとして、それを *appétit sensitif* と呼んだ。人間には外部の物体からイメージをうけとる感覚的能力のほかに、知覚によってかきたてられる感覚的、感情的力が備わっており、それが *appétit sensitif* と呼ばれるものである。そしてこの *appétit sensitif* の運動を passions (情熱・情念) と呼んだ。この *appétit sensitif* には二種類あり、その一つは *appétit concupiscible* であり、他は *appétit irascible* である。前者は自然の傾向、性向にしたがって、容易にその対象へ向かうものであり、後者はその対象へ向かうさいには、あ

る種の困難さ、努力、暴力を必要とするものである。² すなわちこの立場は、passions を concupiscible なものと irascible なものにおける立場であって、これはこの書の著者 Coublaut の発明したものではない。ここでは passions をこのように分類する立場が、どのような系統に属するかを調べようとするものである。というのは passions をこのように二分せず、concupiscence という語でおきかえていた人々もあるようなので、³ それに対して、passions をこのように二分する立場の系譜が、どこまでさかのぼってあつづけることができるかを調べることも、意義のあることだと思ふからである。

Du Vair (1556—1621) も passions を二つに分類している。すなわち concupiscible なものと irascible なものである。そして concupiscible な passions として、plaisir (喜び) または volupté (快樂)、désir (欲望)、haine (憎悪) または horreur (恐怖)、fâcherie (不満)、douleur (苦痛)、pitié (同情)、jalousie (嫉妬)、envie (羨望)、crainte (心配) をあげている。また irascible なものは、前者よりはるかに激しいものであるとし、espoir (希望) や désespoir (絶望)、peur (不安)、courroux (怒り) をあげている。⁴

Coton 神父(1564—1626) も passions を concupiscible なものと irascible なものにかけているし、⁵ Bellay の司教 Jean Pierre Camus (1582—1652) も、passions を concupiscible なものと irascible なものにかけている。そして concupiscible なものとして、Amour (愛)、Haine (憎悪)、Désir (欲望)、Aversion (嫌悪)、Joie (喜び)、Tristesse (悲しみ) の6つの passions をあげ、irascible なものとして、Espérance (希望)、Désespoir (絶望)、Hardiesse (大胆)、

Crainte (心配)、Indignation (憤慨) の五つをあげている。Coublauc に先行するフランスの思索家たちの中で、このように passions を二つにわけ、concupiscible なものと irascible なものをあげているのは、ここにあげた三人だけではないと思う。調べればもっと多くの人々が、この系譜にたつて passions を論じていると思うが、ここでは passions を二分するこうした系譜の概略をたどることが目的であるので、Coublauc 以前にも、フランスでこの系譜に入る人がいたことを知ってもらえばよいと思う。

Litré の Dictionnaire de la langue française の concupiscible の項をひくと、スコラ学の用語であるとして、appétit concupiscible というのは、善とみなすものへ魂をむかわせる傾向という説明がある。また irascible の項目には、やはりスコラ学の用語としての説明があり、appétit irascible, partie irascible, faculté irascible などとして用いられ、魂が怒りたかぶるさまをあらわすのに用いられるとしている。

辞書にのっているこの説明では、やや説明不足のきらいがあるが、ここではこれらの用語がスコラ学の用語であることに注目すればよいと思う。そしてフランスの16世紀、17世紀の思索家に、その説明の根拠をあたえたスコラ学の大家 Saint Thomas d'Aquin (1225—1274) の passions 論を、ここでややくわしく説明しておきたいと思う。

Saint Thomas はまず appétit sensitif を「肉体に関するものの知覚から生まれる欲望」と定義する。この欲望はただちに運動となり、その運動には二つの方向があるとす。この欲望が肉体に快い対象に向かう場合、あるいは苦しい対象からのがれようとする場合、その対象をつかんだり、それからのがれようとしたりする運動は、concupiscible なものと呼ばれる。これに対し、欲望が危険な対象に抵抗する場合、それを破壊したり、中和しようとしたりする運動は irascible なものと呼ばれるようである。いかえれば、concupiscence とは我々を喜びの方へ向かわせたり、苦しみを逃れたりさせる運動であり、怒り(ラテン語の ira)は、抵抗するもの

に対する激しい反動をあらわすものである。concupiscible なものは楽しいものあるいは苦しいものに関係し、irascible なものは、敵対的困難なものに関係するのである。

このように Saint Thomas は passions を二分するのであるが、どの passions が concupiscible なものに属し、どれが irascible なものに属するかについては、次のように説明している。concupiscible なものは善に向かい、悪を逃れようとする、すなわちその対象は楽しいものか苦しいものかである。しかしこうした悪を逃れ善に向かう動きは、時として困難さを伴い、善を得るため、悪を逃れるために戦わねばならぬことがある。このような場合には、その passions は irascible なものになる。なぜなら irascible なものとは困難さを伴うものであるからである。別の言い方をすれば、passions の中には二重の対立がみとめられる。その一つは善または悪という対象の対立からくるものであり、他の一つは、対象は同じであるが、それに近づいたり遠ざかったりしようとする運動の対立によるものである。ところで concupiscible な passions の場合にみとめられる対立は前者であり、irascible な passions の場合にみとめられる対立は、前者および後者である。それ故 concupiscible な passions においては、善に向うものとして、amour (愛)、désir (欲望)、joie (喜び) といった passions があり、悪から逃れる passions としては、haine (憎悪)、aversion (嫌悪)、tristesse (悲しみ) などがある。これに対し、irascible な passions では、善と悪という対象の対立からくるものとしては、espoir (希望) と crainte (心配) のようなものがあり、同じ対象に近づいたり、遠ざかったりする対立によるものとしては crainte (心配) と audace (大胆) のようなものがある。

こうして Saint Thomas は concupiscible な passions に三対のものをみとめている。すなわち amour (愛) と haine (憎悪)、désir (欲望) と aversion (嫌悪)、joie (喜び) と tristesse (悲しみ) である。また irascible な passions にも三対のものをみとめている。すなわち espé-

rance (希望) と désespoir (絶望)、crainte (心配) と audace (大胆)、そして colère (怒り)、この colère (怒り) には対立するものはないとしている。こういうわけで、concupiscible な passions は 6 つ、irascible な passions は 5 つ、合計 11 の passions があることをみとめているわけである。¹¹

このように passions を concupiscible なものと irascible なものに二分して説明する方法は、Saint Thomas によって完成されたわけであるが、Saint Thomas がこうした二分法の創始者というわけではない。こうした二分法はさらにさかのぼって、ギリシャのプラトン、アリストテレスの中にも見ることができる。

プラトンは人間の魂を三つの部分に区分した。齊藤忍随氏はこれを「理性的部分」、「気慨的部分」¹²、「欲望的部分」とそれぞれ訳しておられる。これは Anthony Levy がその著の中で、rational, courageous, appetitive な部分として、それぞれ英訳しているのに相当するものである。¹³この三つの部分に相当するギリシア語は、それぞれ、Logistikon, Thumoeides, Epithumetikon で、これをイタリーの人文学者 Marsiglio Ficino は ratio, iracundia, concupiscentia¹⁴ とラテン語に訳した。iracundia はフランス語では irascible なものという意味であり、concupiscentia は concupiscible なものに相当するであろう。このようにプラトンは、passions を concupiscible なものと irascible なものに二分する先駆者の一人となったわけである。

アリストテレスはプラトンのように魂を三分せず、rationnel (理性的) な部分と irrationnel (非理性的) な部分に二分したが、¹⁵irrationnel な部分に属する passions を、プラトンにしたがって、concupiscible なものと irascible なものに二分したのである。¹⁶

このようにフランスの17世紀に行われた passions の二分法は、その源をギリシアのプラトン、アリストテレスに発するものであり、それが中世に Saint Thomas によって完成されたもので、17世紀のフランス人は passions について

語る時、それに範をとっているのである。

2 passions 論—アリストテレス、ストイシズム、キリスト教

passions の分類についての一つの系譜は以上のようなものであるが、それと並行して、passions は善いものであるか悪いものであるか、人間は passions をどのようにとりあつかうべきかについて、それぞれの立場で論議が行われた。

アリストテレスは、passions はそれ自体としては善くも悪くもないものと考えている。なぜなら、passions は理性の規律とは必ずしも矛盾しないからである。passions は理性の規律に従う場合もあり、従わない場合もある。従う場合には¹⁷美徳となり、そうでない場合は悪徳となる。そして理性に従わない場合、passions が過剰で激しい場合には悪となるので、これを和らげ、穏やかなものとするのが理性の仕事であると考えた。たとえば prudence (慎重) は témérité (向こうみず) と lâcheté (臆病) の中間にあり、中庸をえているので、美徳だと考えるというように¹⁸立場である。このようにアリストテレスは理性を規準とし、passions が理性に従えば善と考えた。passions は善くも悪くもないものであって、それをもつことは悪いことではない。悪いのはそれを過剰にもつことであり、理性の支配下におかないことであると考えた。

これに対しストイシズムは、人間が本来もっていた自然の状態へもどることを理想と考える。この自然の状態というのは、キリスト教という原罪以前の¹⁹状態のことで、これに帰ることを理想と考えた。たとえば我々人間は、何かを所有して喜びを感じずとすれば、それを失えば悲しみを感じる。このように外部のものによって左右されることなく、常に独立して存在するためには、²⁰passions をなくすることが必要だと考える。キリスト教徒は、自分の心の中に passions を感ずることは罪ではなく、自由意志をもって、その passions の動きに同意することが罪である²¹と考えるが、ストイシズムでは、このように自分の心の中で passions を感ずることも悪である²¹と考える。そして passions を根絶

して、全くの無感動の境地に達するのを理想と考えたのである。

このようなストイシズムは、古代ギリシアおよびローマで行われたものであるが、16世紀後半から17世紀にかけて、フランスでは、宗教戦争その他の社会的不安があったために、このような厳しい世相の中で生きるための心のよりどころとして、このストイシズムがフランスでもとりあげられ、17世紀のはじめまで、ネオ・ストイシズムの名で流行をみるにいたった。Du Vair (1556—1621) や Camus (1582—1652) がその代表者である。このネオ・ストイシズムは純粋なストイシズムではなく、キリスト教の加味されたストイシズムであって、17世紀の中ごろの思索家 Senault 神父 (1601—1672) の著作の中にも、このネオ・ストイシズムはその影を色濃く落としている。

このネオ・ストイシズムの動きに対して、キリスト教的感情が強く復活してくるのは1610年頃からである。キリスト教ではそのドグマとして「原罪」を主張する。原罪というのは、アダムとイヴが神の命令にそむいて、それまで完全に罪なくすごしていた楽園を追放され、それまで清浄であった passions も腐敗、墮落してしまったという教えである。楽園から追放されて、人間は腐敗、墮落してしまったわけだが、それでもすべてが腐敗、墮落してしまったわけではなく、原初の清浄さへの記憶が人間には残されており、この記憶をたどって、人間は原初の完全さへ戻ろうとあこがれ、つとめているのであるという。²⁵しかし人間は弱いものであるので、神の恩寵 (grâce) なしには、それをなしとげることが出来ないとキリスト教は説くのである。アリストテレスは、passions を人間の理性に従わせることにより、完全な人間になろうとし、ストイシズムは、passions はすべて罪であり、悪しきものであるので、これをとりのぞくことによって理想の境地に達しようとする。ストイシズムは、このように人間の魂の力を過信して、自惚におちいる危険性がある。これに対してキリスト教は、まず人間の無力さを主張

する。原罪によって腐敗した passions を正常にもどすためには、神の恩寵による加護が必要である²⁶と考えるのである。キリスト教はアリストテレスと同様に、人間の passions は本来善くも悪くもないものであるという。これらの passions は、原罪以前にはそれぞれ所を得て、清浄なものであったという。前にもふれたようにストイシズムは、人間の心内の passions の動きを感じること、それ自体までも悪だと考えるがキリスト教ではそうは考えない。人間が心内の passions の動きを感じすることは不可避なことであって、それだけでは罪ではない。罪であるのは、こうした passions の動きに、理性 (raison) と意志 (volonté) をもって同意することである。²⁷人間には自由な意志が与えられており、その自由な意志で passions に同意することにより、ある passions は美德となり、ある passions は悪徳となるのである。passions そのものには善悪はなく、自由意志をもってそれをするか否かに倫理的、道徳的規準がおかれているのである。passions ならば動物ももっている。それが道徳的価値、いいかえれば人間的価値をもつのは、それが自由意志によるか否かにかかっている²⁸のである。

このように人間の行為の道徳的価値は、人間の自由意志にかかっている。しかし意志が正しく発動するためには、人間の理性が善悪を見わけねばならない。そして人間の理性が意志を正しく導くためには、神の恩寵によって、²⁹理性が正しく照されていなければならない。Coton 神父 (1564—1626) はそれについて次のような祈りをしている。「ただ一つの『原理』から出るように、『父』と『ことば』の口から出る神の風よ、我々の情念のはげしさと感情の混乱を冷して下さい。親切な霊、望ましい息吹きよ、我々をこころみる悪い空気、イラシブルなものの水蒸気、コンキェピシブルなものもやを散して下さい。」³⁰

最後にしめくくりとして、前にとりあげた Antoine Coublaut の passions 論を簡単に紹介しておこう。passions は本来神がつくられたも

ので、罪のないものだと言は説く。passions は正当な対象をもつし、また持つことができるし、またほめるべき目的を持っているし、また持つこともできる。また正しい、キリスト教にふさわしいものとなる³¹ことができる。ただ passions には nécessaire (必然的) な部分と libre な (自由な) 部分がある。nécessaire な部分は個体の保存その他のため、必要なものであって、問題となるのは libre な部分である。この libre な部分が原罪以来混乱し、過剰なたかぶりを示している³²ので、これを正せばよいと言う。passions 自体は本来罪のないもので、責むべきはこの passions 自体ではなく、それがもつ libre な面であり、この libre な面が正しく働かないために、混乱を生じ、passions が過剰なもの、たかぶったものとなっているのである³²。そしてこの過剰なものをなおせばよいわけであるが、これには神の助力が必要であり、その助力はキリストの十字架によって与えられていると説く。

Coublaut は人間の状態として、三つの状態をあげている。それは(1)原罪以前の罪のない純白な状態、(2)は原罪によって人間がおちいった腐敗の状態³³で、これは混乱に満ちている。(3)はメシアであるキリストによって贖われた状態である。このキリストによる十字架の贖いは、歴史上ただ一回おこったことなのである。神は永劫の昔から、キリストの十字架によって、人類を贖うことを決めておられた。それ故この十字架によるキリストの贖いの効力は、キリスト以後はもちろんのこと、キリスト以前にもさかのぼることができる³³。そしてアダム、アベル、エノシュ、ノエ、アブラハム、ヤコブ、モイゼなどが、passions の過剰をなおして、それを穏かなものとする³⁴ことができたのは、キリストの降臨を予期してのことであり、キリストの十字架の効力があらかじめ時をさかのぼって働いたからだという。キリスト以後はもちろんのこと、人間はそれによって神の恩寵を受け、passions を穏かなものとし、人間を完成³⁴することができる³⁴と説いている。

16世紀後半は宗教戦争のために、人々は苦しい生活をしいられ、この困難をのりきるために、ストイシズムに赴くのが多くみられた。そして17世紀初頭へかけて、ストイシズムはネオ・ストイシズムとして復活したのである。これに対してキリスト教的感情の復興は1610年ころよりはじまり17世紀の終わりまでつづくのである。そしてストイシズムでは passions の問題は最も重要な問題であり、この passions の重視はネオ・ストイシズムにうけつがれ³⁵、さらに17世紀のキリスト教へとうけつがれて行った。Senault 神父 (1601—1672) の著作を研究した Miloyévitch も言うように、passions の問題は17世紀でもっとも重要な問題であった³⁵と言うことができよう。それは二流の思索家ばかりではなく、デカルト、パスカル、ボシュエなどによってもとりあげられているからである。この論文では当時の passions 論を解明する手がかりとして、passions を concupiscible なものと irascible なものに二分する系譜をたどって見たわけであるが、このほかにも passions をこのように二分せず、passions イコール concupiscence³⁶として論じている著者もある³⁶ので、今後はその面をも調べねばならないと思っている。

注

- 1 Anthoine Coublaut : *Réflexions spirituelles sur les passions, ou les passions traitées par rapport à la vie spirituelle*. P.4
- 2 *ibid.*, P.9-P.10
- 3 パスカルはこのような立場の一人であった。
- 4 Voukossava Miloyévitch : *La théorie des passions du P. Senault et la morale chrétienne en France au xvle siècle*. P.71
- 5 *ibid.*, P.103
- 6 *ibid.*, P.121-P.122
- 7 Etienne Gilson : *Saint Thomas moralist*. P.113-P.114
- 8 *ibid.*, P.115-P.116
- 9 *ibid.*, P.116
- 10 *ibid.*, P.117-P.118
- 11 *ibid.*, P.120
- 12 斎藤忍随著『プラントン』(岩波新書)P.130-P.131

- 13 Anthony Levy : French moralists P. 8
- 14 ibid., P.8 脚注
- 15 René-A. Gauthier : La morale d'Aristote. P.22
-P.23
- 16 Anthony Levy : French moralists. P.10
- 17 ibid., P.10
- 18 Voukossava Miloyévitch : La théorie des passions
du P.Senault... P.183
- 19 ibid., P.64
- 20 ibid., P.51-P.52
- 21 ibid., P.104
- 22 ibid., P.64
- 23 ibid., P.161-P.162
- 24 ibid., P.85
- 25 ibid., P.178-P.179
- 26 ibid., P.143
- 27 ibid., P.104
- 28 ibid., P.114
- 29 ibid., P.132
- 30 ibid., P.103
- 31 Anthoine Coublaut : Réflexions spirituelles sur
les passions... P.18-P.20
- 32 ibid., P.11
- 33 ibid., P.45
- 34 ibid., P.64
- 35 Voukossava Miloyévitch : La théorie des passions
du P.Senault... P.52
- 36 パスカルはその一人であった。